
ブランコ

ツグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブランコ

【Nコード】
N3364P

【作者名】
ツグ

【あらすじ】
・ ・ ・ さつきが自殺未遂をした。
その連絡に嶺は深夜でも走る。愛ではない。恋でもない。この関係はなんだろう。

さつきが自殺未遂をした。

家に帰るまでわざと見ないでいた携帯電話に何件かのメールと電話の履歴。それが語るものが何度目かの知らせであることに嶺は深いため息をついて、せっかく脱いだ上着を手にとると再び袖を通していた。

居間では妻の英子がせっせつと夕飯の支度をしている。たぶん、見ないままにして夕飯を食べ、風呂には入り、寝てしまうことも嶺には出来る。さつきが自殺をしたところで急いで駆けつけなくてはいけない義理も義務もないのだ。頭ではそれがわかっているのに体はまるでよく躡された犬のようにきびきびと感情とは逆に病院に向かおうとする。

部屋を出ると台所で作業していた英子が振り返った。

嶺の顔を見たとき英子の顔は渋いものになった。それほど自分は鬼気迫る顔をしているのだろうか。

「どうかしたの？ なにか、あった」

「知り合いが事故にあったんだ。ちよつと病院まで行ってくる。食事はできないかもしれないから、先に食べて寝てくれないか」

嶺の言葉に英子は顔をしかめたが何も言いはしなかった。

いつもつく嘘を彼女もわかっている、わからないふりをして騙されてくれる。申し訳ないような、ありがたい気持ちで家から飛び出し、車に乗り込むとすぐさまに出発した。

車を運転するとどうしても口寂しい気持ちになる。無意識に懐の煙草を一本、取り出して口にくわえていた。

さつきは十年來になる嶺の女の友人だ。

知り合ったのは高校生のとき、背伸びした足を踏み込んだバーだった。音楽と雑踏の曖昧な世界は若さに溢れていた。酒と女と、そ

れに危険なゲームを楽しむにはちょうどいい世界だった。

嶺はそこでカクテルをとてもおいしそうに飲むさつきと知り合った。

彼女は自分を人にどう見せるか、そういうことを考える女性だった。

女が女をしている。

目が離せなかった。

さつきは男たちの視線をいやがることもなければ、猫が毛を撫でられるように受け入れくすぐったげに笑うのだ。

「ねえ、お酒を奢って」

初対面にもかかわらずさつきは嶺に空のグラスを差し出して言った。

どうしてさつきがあのととき自分を選んで声をかけたのか。嶺には未だにわからない。自分はあるときもそうだが今も平凡だ。人に誇れるものはなにもない。

さつきと話せたとき嶺は胸がどきどきときめくのを押し隠そうと必死にクールに決めようとしてみた。さつきの飲んでいたカクテルを注文して自分も同じものを飲んだ。

カクテルはジュースのように甘かったが、その分、飲み過ぎてあとになって酔っぱらって気持ち悪くてトイレでさんざんに吐いた。そんな嶺をさつきは見て楽しそうに笑った。大人ぶりは無理だときそのとき悟った。

ブレーキも踏まずに、カーブを曲がる。

タイヤの軋む音がする。

目の前の信号は赤が点滅していた。かまわずにスピードをさらにあげた。エンジンがうなり声をあげる。風よりも早く走りたい。さつきに会いたい。会ってやりたい。今すぐに。

家を出るまで抱えていた冷めた気持ちが車に乗ってから急激に熱を帯びていくのがわかった。

こうなることはわかっていたんだ。さつきが自殺するのはいつものこと。そして自分がそれを追いかけるのも。

いつもそうだ。

さつきという女はいつも嶺を追いかける立場にさせた。

さつきはとても不安定だった。泣くこともあれば、突然と怒りだすこともあった。そのたびに嶺はさつきの世話に追われた。

はじめのうちこそ、さつきの世話は嶺にとっては楽しいものだった。いい女の世話をするのは男の役目だと思ったからだ。だが、さつきはただそれだけの女ではなかった。いつもトラブルを起こしては嶺を憂鬱にさせ、苛立たせた。だが、それでもいつもさつきの姿を探し、彼女がトラブルを起こせば電話一本でどこになりとも、どんな時間でも飛んでいったのは、嶺自身の弱さだった。惚れているというよりは、ただ下僕のようにこき使われている。

嶺はさつきの腹心。決して裏切らない、なにをしても味方である。嶺がいるからさつき何も恐れずに遊び歩いたのだ。

どうにかしてくれ。嶺は心の中で何度もため息をついては、さつきのために働いた。それがますますさつきの行動を過激なものにするのだと知っていながら、嶺はさつきのために走り回ることをやめられなかった。

はじめは、その気持ちをなんといいばいいのか嶺自身は困り果てた。愛というには嶺は疲れ果てていたし、恋というものよりはもっと確実な形をしていた。

たぶん、さつきには自分が必要なのだ。そう思うことが嶺の体を突き動かしたのだ。

さつきは女王さまだった。

複数の男を渡り歩いていたが、嶺には体を開かない。セックスをしたことを二人はない。いや、告白すると一度だけ酒に酔っ払って、そのままセックスに持ち込んだことがあるが、それは甘いものとは程遠かったことは確かだ。

さつきは様々な男を支配し、魅力でとろかせた。だが、さつきは誰のものにもならない。そして誰を束縛もしなかった。猫のようにしなやかに、甘えるときとそっけなくするときを使い分けていた。女だった。だが、時として、そのためにさつきは一人になることもあった。恋をすればいずれは破滅か束縛が待っている。さつきは迷いもせずに破滅を選ぶタイプだった。

その男と付き合うとさつきが嬉しそうに口にしたとき、嶺はやめておけと口にした。いい噂は聞かない男だった。それでも友人にしておくにはちよつどいい男だった。友人以上の関係になると破滅しか待っていないような男だったからこそ、嶺は危機感を感じた。さつきの目が恋をしていたから。

さつきは誰かと付き合うとき、しつかりと恋をする。彼女は確かに猫で、そっけなく、破滅の道を選ぶような女性だったが、それでも誰かと体を重ねるときはその相手を心から愛していた。彼女が破滅の道を選ぶのは、自由と愛を天秤にかけた結果、いつも自由のほうがかつたということだ。

そして、さつきは驚くほどの切り替えの速さで人の愛を捨てられる。それでも彼女が何も感じない人種でないことを嶺は知っていた。だから、やめておけと口にした。あのとき、もつとしつかりと止めておけばよかった。

病院につくと、嶺は受付ですぐにさつきの名前を口にし、緊急治療室に案内された。むせかえるような薬品と清潔さの世界。白いベツドにさつきが横たわっていた。手には点滴を打たれているのに嶺は椅子に腰かけて、そつと、その手に触れた。情けないような、泣きたい気持ちにとらわれた。もつと何かできればよかったと思う反面、自分に何ができただろうかと冷たい気持ちにもなる。はやく死ぬなら死ねばいい。死ななくてくれとも思う。自分はどちらなのだろうかと嶺は考えて、たぶん、両方なのだと感じる。生きていれば生きていて困るし、死なれたら、それはそれで悲しい。

さつきが自殺をするようになったのは、一年くらい前からだ。付き合いだした男は最低で、さつきをよく苦しめては楽しむような、悪趣味で、それが愛だと信じて疑わないような男だった。だからやめておけと口にしたのにと嶺は苦く思う。その結果、さつきは耐えきれずにじわじわと壊れていった。愛して傷ついて壊されて行く様子をただ見ていた。出来ることといえば愚痴も聞くぐらいで、彼女が泣くのも、酒におぼれるのも見ているしかなかった。その結果に嶺は一度だけさつきを抱いて、一生忘れられないいやな思い出を作った。

苦しみが愛なのだと言うならば、自分のこの気持ちはなんだろう。愛だというならば吐き捨ててやる。恋だというならば潰してやる。この気持ちはそんなものじゃない。

嶺は幸いにも、誰かが思いあい、支えあうことが愛だということを知る、そんな普通の家庭で生まれ、育った。それが出来ない者がいることなど知らなかったのだ。だからこそ、さつきに惹かれたのかも知れない。積み上げたものを壊していくしか出来ない。破滅しか待たない。だからやめておけと口にしたのに。

さつきが壊れ始めて、精神が不安定になるたびに嶺は恐れていた。服を引き裂いたり、酒を全身にかけたりする様子はただ事ではない。このままでは危ない、自分が。

嶺は自分がさつきに引きずられていくことを恐れたのだ。だから逃げるようにバーに行くことはやめた。学校に通う、勉強に励む。まるでまともな学生のふりをした。逃げたのだと思う。その結果にさつきがはじめて自殺をしたと携帯電話で知らされたとき、泣けもしなかった。自分のせいだとあときは思った。いまは思わない。さつきが壊れて自殺しようとするのは彼女のせいなのだとはつきりと思うからだ。だが、それでも嶺はさつきが自殺未遂をするたびにたった一人で駆け付け、その手をそっと握りしめる。細く手を握りしめて、祈るように心の中で尋ねる。まだ生きてる。まだここにいる。さつきの携帯電話にはいつも自分の電話が登録されている。

この繋がりを入はなんだというのだろう。

さつきが酒に酔って上機嫌なとき、嶺はいつも憂鬱になる。さつきの飲み代を支払い、さらには彼女が酔ったままにふらふらと歩いていくのについていく。このままほっておいたら、路上で眠りこけて変な男にレイプされるかもしれないという恐れがいつも嶺にさつきの後ろを歩かせた。その日は付き合う男に再びいたずらに気持ちよくさせてもらったさつきは上機嫌だった。このあと、きつと何かしら最低のことが、そう自分を気持ちよくさせる男によって与えられることをさつきは経験上知っているのに、それでも今だけは心地よさそうにしていた。危ない足取りで公園までたどりつくときさつきはブランコに駆け寄った。

「私ね、ブランコが大好きなの」

「へえ」

ぎいと鉄の軋む音がしたのに目を向けると、さつきがブランコにまたがり、揺れ動かしている。

「けど、人気だから、なかなか遊べなくていつも待ってた。夕方、

そう、夜になってはじめて出来たの」

「それまで待ってたのか。短気なくせに？」

「ほしいものなら、いつまでも待ってわ」

「へえ」

嶺は煙草を吸った。春先の季節だが、まだ夜は寒かった。

「俺は苦手だった。ブランコってふわふわしていて、揺れるだろう。

それにスピードも出せる。それが恐かった」

「弱虫ね。私は、それが好きだったわ」

さつきが馬鹿にしたように笑うのに嶺は肩を竦めた。

「私の家ね、パパとママがいないから、いつまでも遊べるの。ずっとよ。ずっと。……だから、夜のほうが素敵だって知ってた」

「……寂しかったか？」

馬鹿なことを尋ねたと後悔したが、一度口から出た言葉はどうし

ようもない。ふわふわと宙を漂い、最後にはさつきの耳の中にはいっていく。

「うん。寂しさを紛らわせる方法を私は持っていたもの」

さつきが笑うと嶺は言葉をなくして、押し黙った。それ以上は聞いてはいけなと思ったからだ。

たださつきの気持ちのようにブランコはきいきいと音をたてて、前へ、後ろへと振り子のように揺れる。揺れ続ける。

「んっ」

さつきが目を開けたのは、嶺が駆け付けた一時間後だった。それですやすやと眠っていた彼女は、まるで目覚めることを拒絶するかのように眉を潜ませて、小さなため息をついたのにち目をそっと開けて、自分の視界にはいる嶺をまじまじと見つめたあと、ああと声を漏らした。ようやく自分がなにをしたのか、ここが現実だと自覚したらしい。

「煙草の灰を飲んだんだった？ ひどい匂いだ」

「うん。よく覚えてないけども」

「このまま病院に入院するべきだって先生は言ってる」

「いや」

さつきの返事は短く、強い。死のうとしているのに、どうしても強いのだろう。

「さつき」

「なに」

「死ぬなよ」

「嶺、疲れてる？」

「お前のせいだな」

煙草を吸おうとして、病院だと思いだして諦めた。

「私のこと嫌いって口にしたら、もうやめてあげる」

「……さつき」

真っ直ぐに嶺はさつきを見る。さつきの目は黒く、淀んでいた。

まるで酒を飲んだあとのように。その瞳に以前のような魅力を嶺はもう感じられないでいる。

「俺は、どうすればいい」

「どうって」

「それを口にしたくないし、その勇気がない」

十年も一緒にいたんだぜ。たった一言で変わるのか。そして終わるのか。俺はお前の腹心なの？

嶺は心の中でさまざまな問いをかけるが、どれもさつきの心に響いたりしないことはわかっている。それだけ二人は歳をとったし、嶺は一番肝心なときに逃げたのだ。その逃げた罪をここで支払っているのだ。

たとえ、この代償を支払いきったとしても、嶺はこのままでは逃げられない。この愛は何もうまない。肥料も、耕すべき手入れの手も、嶺は持っていないのだ。

「俺はお前を見捨てる悪党になりたくないんだよ」

「けど、それだと救われない」

どちらもね。さつきの声は嶺の心に響いてくる。

さつきは出会ったころのまま変わっていない。その危うさも、愛しさも。それが嶺を困惑させ、絶望に叩きつけた。変わったのは自分なのだとありありと思い知らされた。

「嫌いだ」

一言だけ口にして嶺はさつきの手を両手で握りしめてうつむいた。泣きたいが、涙は出てこなかった。

「いいわよ」

さつきの声は慈愛に満ちていたのに嶺は声をあげて泣きだしそうになった。しかし、さつきはそんな余韻を嶺に与えはしなかった。素早くベッドの傍らに置いてあるテーブルにある携帯電話を手にとると、大きくふりあげて床に叩きつけた。ぱんつと携帯電話は音をたてて碎け散る。壊れてしまった携帯電話を嶺はじっと見つめていた。嶺もそれにならって自分の携帯電話を取り出すと、立ち上がり、

床に投げ捨てた。砕け散った携帯電話をじつと見つめて嶺は深いため息をついてさつきを見た。さつきは微笑んでいたのに嶺は泣きながら笑った。

ブランコのように、ゆらゆらと視界が歪んで見える世界に嶺は背を向けて立ち去った。揺れ続けるブランコから、飛び降りたときのような、もっと乗っていたかのような、それでも帰らなくてはいけないという不安と恐怖と名残惜しさの混ざった感情からの解放に心を締めつけられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3364p/>

ブランコ

2010年12月5日23時25分発行